郷土への扉
The gateway to local history

# 神仙境 ～仙人が住む山～

正月飾りにも使われる七福神は、中国の仙人伝説の影響を受けたという説があり、仙人のような姿をしています。そんな仙人、実は霧島山とは縁深い存在なのです。

## 仙人伝説が絶えない場所

江戸時代において、霧島山は仙人が住む場所として有名でした。不思議な老翁や絶麗の美女の目撃談があったり、果物が豊富に実る場所が突如として現れては消えたりする不思議な神仙境（仙人が住む聖なる世界）が霧島山にあると、薩摩藩が編さんした地誌『三国名勝図会』に書かれています。

当時、多くの人に読まれた橘南谿著の『東西遊記』には、もともと武士であった雲居官蔵が世俗を捨て、霧島山にこもることで仙人になったと書かれています。不思議な場所として知られた霧島山。仙人の世界に入り浸っていた人の具体的な記録も存在します。

## 神仙境に入り浸った人

市来の伊作田村（現・日置市）出身の善五郎は15歳の頃から26年間、霧島の明礬山で働いていました。夜中に一人で明礬山を歩いていると不思議な出来事に何度も遭遇。ついには神仙境に招かれ、広い御殿に連れて行かれます。そこには若くて髪の長い女性が6人、庭には桃・栗・柿が実り、30センチほどの犬や長いたてがみの馬がいたそうです。打ち出の小づちをもらった善五郎はその後も幾度となく神仙境を訪れ、茶菓子をご馳走になります。

善五郎の体験が記された『幽郷真語』
（国立国会図書館ライブラリー）

明礬山の半腹より少し上の場所らしいのですが、「行こう」と思い立つと前後の記憶がなくなり、気付いたら行き着いているとのこと。うつろな目で怪しく歩き始める善五郎を周りの人たちは心配し、後をついて行きますが、いつも途中で見失ってしまうのです。

善五郎は神仙境の話をあまり人には話しませんでしたが、徐々に知られるようになり噂が広まっていきました。62歳になるまで行き来していましたが、「長くこの世界にいたら戻れなくなる」とのお告げがあり、急に行けなくなってしまいました。

## 学者が注目する地域

天保2（1831）年には八田知紀という薩摩藩士が、62歳の善五郎から聞き取り調査を行っています。全国的に有名な国学者・平田篤胤は、霧島山の仙人話を何十年も切望していました。その思いが薩摩藩に伝わり、調査報告書が提出されると、平田は神棚にこの報告書を供えるほど喜びました。後に『幽郷真語』として出版された報告書は、多くの人に読まれていきます。

活火山の霧島山は、珍しい岩や植物などが多く存在します。その中で人々が不思議な体験をし、それが不思議な物語として全国に広まり、霧島山は仙人の住む不思議な場所として認知されていきました。そうして、神話・伝説を調べる学者などの注目を集めたのです。

現在は「神話の地」という単一的な認識がありますが、歴史資料を見ると、霧島山には多様な伝説があったことが分かり、その伝説を巡る考察や影響を受けた人々の様子が見えてきます。

（文責＝小水流）

---

**隼人歴史民俗資料館企画展「霧島と神をめぐる人々」**

鹿児島大学附属図書館の貴重書を展示し、高屋山上陵など神話の伝承地と江戸時代の学者とのつながりについて紹介します。

- 期間＝1月24日(火)～2月26日(日)
- 場所＝隼人歴史民俗資料館（鹿児島神宮境内）
- 入館料＝大人150円、高校生以下80円

**■企画展講演会**

展示内容や鹿児島神宮の祭神などについての講演とパネルディスカッションです。

- 日時＝2月11日(土・祝)午後2時～4時
- 場所＝国分シビックセンター多目的ホール
- 講師＝日隈正守さん(鹿児島大学教授)、亀井森さん(鹿児島大学准教授)、市教育委員会職員
- 定員＝先着100人　● 参加料＝200円

申し込みフォームはこちら

問＝社会教育課　☎(64)0708